

東大阪市埋蔵文化財包蔵地調査概報15

若江寺跡・若江城跡



1975

東大阪市教育委員会

はじめに

東大阪市若江地区は、従来より若江北遺跡、若江郡衙跡、若江城、巨摩廃寺跡などの多くの遺跡が密集した地域であると考えられてきました。

しかしながら、発掘調査は部分的におこなわれているにすぎず、所在地さえいまだに判明しない遺跡が多く存在しています。近年、若江地区の開発は急ピッチで進められており、発掘調査の必要性を痛感していたところ、幸いにも今年度、国庫補助事業として発掘調査を実施するはこびとなり、とりあえず開発が予定されている土地について実施しました。

調査の結果、若江城の遺構・遺物などを多數発見し、城の位置を確認することができたのは大きな成果であります。しかしながら、若江地区は広大な面積があり、この調査はやっと端緒についたばかりであります。今後とも遺構・遺物の追求を通じて若江遺跡の全貌を明らかにしていかなければなりません。

調査の実施にあたって、ご協力いただいた関係機関、学生諸氏及び土地所有者の方々のご好意に感謝いたします。

東大阪市教育委員会

教育長 小林 俊一

目 次

はじめに.....	1
1. 歴史のあらまし.....	3
2. 遺跡・遺物の発見と調査に至る経過.....	5
3. 調査の概要.....	8
I. 若江寺跡.....	8
II. 若江城跡.....	11
4. まとめ.....	23
図版.....	

例 言

1. 本書は、東大阪市教育委員会が、昭和49年度国庫補助事業（総額2,000,000円、国庫50%府費25%）として計画し、文化財課が担当し実施した若江寺跡、若江城跡の緊急発掘調査事業の概要報告書である。
2. 調査は、昭和49年11月28日より昭和50年3月31日まで実施した。調査の実施にあたっては、土地所有者の竹内誠、川口治三郎、東田保の諸氏、ならびに若江農業協同組合の方々には大変お世話になった他、東大阪市遺跡保護調査会の協力を得ることができた。記して感謝の意を表する。
3. 調査は、勝田邦夫、今井清氏の参加を得て、下村晴文が担当した。本書の執筆は、1、2、と瓦の説明を藤井直正、出土遺物を勝田邦夫、遺構の説明を下村がそれぞれ分担した。
4. 本書の作成にあたって、出土瓦について東大阪市文化財専門委員藤澤一夫氏（四天王寺女子大学教授）の教示を得ることができた。また、東大阪市文化財保護委員長川中誠三氏からは若江城・若江寺字切図の提供をうけることができた。記して感謝の意を表する。

1. 歴史のあらまし

東大阪市若江本町・若江北町・若江南町の一帯は、古代以来の歴史が重層する地域であり、遺跡・遺物をはじめ、さまざまの文化財を今日に伝えている。

この若江の地域は、河内平野の中央に位置し、古大和川によって形成された微高地状の地形で、古い時代には、その名の示す通り水辺にのぞむ土地であったと考えられる。

現在の若江集落の西はずれ、旧橿原川（第二寝屋川）沿いの若江西新町には、数かずの資料の発見によって注目されている瓜生堂遺跡が所在し、この地域の歴史が、遠く弥生時代にはじまつたことが知られている。^①

歴史時代になると、河内国若江郡の中心となり、おそらく若江郡全体をおさめる郡衙がこの地に設けられたと推定されるが、遺跡は未確認である。^②また、若江南町に所在する若江鏡神社は、『延喜式』の神名帳に記載されている式内社であり『文德実錄』齊衡元年（854）4月条に、「授河内国大雷火明神從五位下」と見える古社である。^③

平安・鎌倉時代の文献によると、この若江には、山城石清水八幡宮領および同醍醐寺領の荘園がおかれていたことが知られる。

この若江の地には、若江寺とよばれる寺院があった。比叡山延暦寺の座主に任じられた尊大僧正の伝記である『尊意贈僧正伝』に記事があり、平安時代の元慶年間（877～885）に存在したことが明らかである。^④

若江の地が、日本史の舞台として登場するのは、南北朝時代から室町時代であり、史上有名な応仁の乱、さらに100年にわたる戦国時代の導火線ともなった河内国支配の拠点として、この地に「若江城」が築かれたことである。この若江城をめぐる時代の動きは、当時の文献によってたどることができるが、その大要は次の通りである。

「若江城」は、南北朝の動乱がようやくおさまった明徳元年（1390）、畠山基國が河内国の守護になったころ、守護代遊佐氏の本拠として築かれた。若江の土地が選ばれたのは、古大和川の流れと湿地に囲まれている自然の要塞と、ここが河内国の中心であり、河内の南北を見わたすことができるということが理由であったと考えられる。

畠山基國の後も若江城は遊佐氏が守っていたが、宝徳年間（1449～52）からはじまつた畠山氏の家督相続をめぐる争いは、若江の地を戦乱にまき込んだのである。それは、畠山持國の実子義就と養子政長の争いであったが、義就方に山名宗全、政長方に細川勝元が加担し、ついに応仁元年（1467）にはじまる応仁の乱をひき起こすことになった。文明9年（1477）、中央での戦乱は一応終結したが、畠山氏の争いはつづき、若江城ははげしい戦いの末、義就方が占領するところとなった。しかしその後の推移は史料が乏しくはっきりしたことはわからぬ。

阿波に起きた三好長慶が、飯盛山城を拠点として河内の領國化を志し、河内一国を従え

たのは、永禄3年（1560）のことであった。長慶の養子となり、後に家督をついだ義継は、若江城に入って中河内一帯を支配した。

永禄11年（1568）、織田信長は足利義昭を奉じて京都に入ったが、その年信長は若江城を安堵した。その後信長と義昭の仲は険悪化し、義昭は京都を追われ、義継を頼って若江城におもむいたが義継は城に入れなかつた。若江城主三好義継は義昭の妹を娶っていたため信長との間も不和となり、家臣の内通もあって、天正元年（1573）信長は若江城を攻めた。この時義継は城の樓門の上で自害したと伝えられている。

義継の死後、信長は若江城を三好氏の家臣であり三人衆の一人であった池田丹後守教正に与え、その支配するところとなつた。この池田丹後守は熱心なキリストンであった。当時日本に来ていたイスパニアの宣教師の一人ルイ・フロイスは若江に来て祭りや布教を行なつているが、本国に書き送った書簡の中に、

シメアン池田丹後守と称し、河内国若江といふ大いなる城の部将たる高貴なる武士なり。同所には昨年（天正4年（1576））好き会堂を建築せり。

と記していく、若江城下に教会堂の建てられていたことが知られる。

こうした数かずの歴史を秘めた若江城もその終末は明らかではない。天正6年（1576）信長は堺へ行く途中若江城に泊つたが、天正9年（1590）の日付のあるフロイスの書翰には、「池田丹後守の今居る八尾の……」とあり、「つぎに更に進んで若江の中央を通つたが、ここには今城も何もなく、唯多数の住民が居る町のみがあつた」と記している。池田丹後守が八尾に移つたことはともかく、どうして若江城は忽然と消滅してしまつたのであろうか。

ところで、若江城をめぐる戦乱の記録はたびたび文献に登場するが、肝腎の「若江城」そのものの位置や、規模・構造についてはまったく記録がない。わずかに『応仁前記』の記事の中に、

若江ノ城ニ籠ルナラハ彼城四方深田也。口ニツニ拵テ所々ヲ掘切搔櫛搔キ逆茂木引テ待カケ…

と表現されているにすぎないのである。

① 瓜生堂遺跡調査会『瓜生堂遺跡』（昭和46年）、『瓜生堂遺跡－資料編』（昭和47年）、『瓜生堂遺跡Ⅱ』（昭和48年）

② 若江郡衙は、郡名と同じ地名が後世まで伝えられたこの地に所在したと考えられるが、まだ明確な遺構を検出しており、その位置等は不明である。若江北町から「若」の墨書きのある土師器が出土していることは重要である。

③ 大雲火明命、息姫帝綱命、応神天皇を祭神としている。社殿の建っているところを“鏡塚”とよび、古墳であると伝えられている。本殿前に“雷の手形石”と伝える自然石がまつられている。

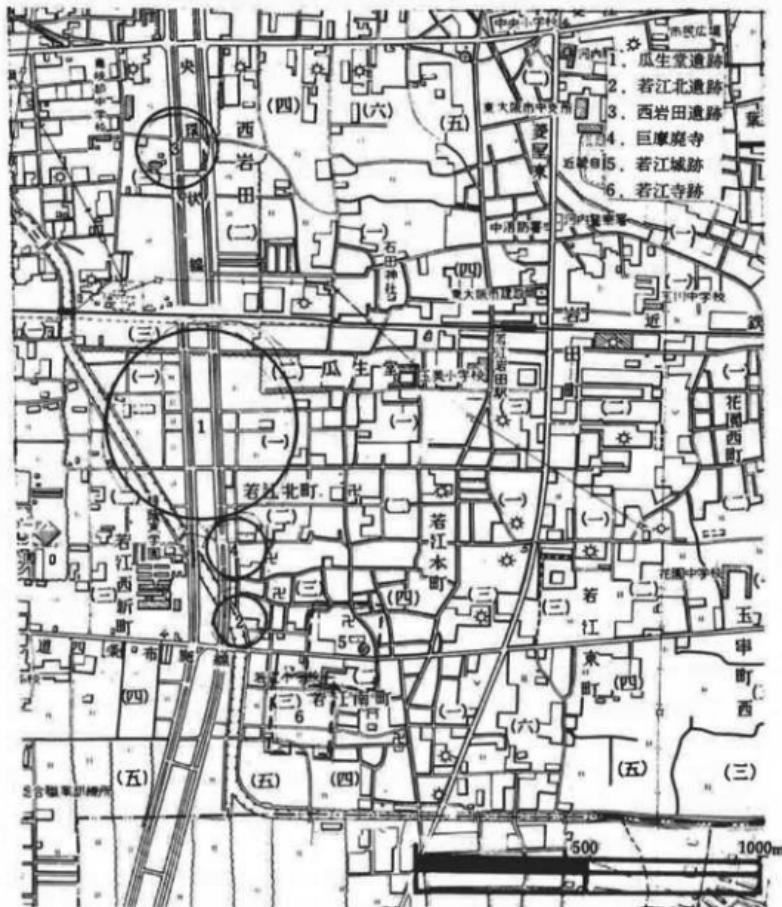
④ 『尊意僧正伝』（『続群書類』、第8輯下所収）に次の記事がある。

同六年（元慶6年）。生年十七。……十月下旬。福洛之次。寄宿河内国若江郡若江寺。有白心木。其枝折落。切取尺余。荷肩帰山。造千手觀音像也。一生帰依之尊是也。

尊意僧正が立寄った理由はともかく、元慶6年（882）に、若江寺が存在したことを物語る貴重な史料である。なお、現在八尾市木ノ本に所在する光蓮寺は山号を若王山といい、この若江寺の後身と伝えられている。

2. 遺跡・遺物の発見と調査に至る経過

若江の歴史については、早くから人びとの関心を集めて来た。とくに「若江城」については、大正年間に相次いで刊行された『大阪府全志』や『中河内郡誌』にくわしい考証がのせられている。また、大正12年に故片岡紫峰氏が著した『中河内郡廃寺』には、若江寺をは



第1図 若江城・若江寺跡周辺図

じめ数カ所の寺院跡が収録されている。

一方、若江の地域の各所から、土器や古瓦が出土することも、早くから地元の人びとに注意されていたようである。とくに昭和9年、楠根川の流路が改修された際、随所でおびただしい遺物が出土したようで、『中河内郡誌』編集委員であり、若江北町信行寺の住職であった故巨摩峰春氏をはじめ、二三の有志の方がたによって収集、保存されていた。^①

若江鏡神社の西方には「寺垣内」の字名がのこり、古瓦が多数発見されることから「若江寺」の遺跡と考えられ、ここから出土する古瓦の一部は若江鏡神社に保存されていた。^②

このように、若江の地域から遺物の出土することについては関心が寄せられていたが、「若江寺」や「若江城」など遺跡を関連づけ、ひいては若江の歴史を考古学的に解明しようということには至らないまま現在に及んだ。

昭和38年、若江集落の西方に幅員120mの大坂中央環状線が敷設されることになったが、この敷地の中に寺院跡が所在し、工事に先立って昭和39年3月に発掘調査が行なわれた。これが「巨摩堂寺」であり、この地域における最初の考古学的調査であった。調査の結果、平安時代～鎌倉時代の仏堂の基壇を検出し、現在若江北町に所在する薬師寺の前身であり、「河内志」に見える「巨摩堂」の遺構であると考えることができたことは大きな成果であった。^③中央環状線の工事では、工業用水道管の敷設に伴って多数の弥生式土器が出土し、これが瓜生堂遺跡発見の端緒となったことは、よく知られている通りである。^④

昭和42年2月、若江の地域をふくむ旧河内市は、枚岡、布施両市と合併して東大阪市が発足したが、その直後、若江北町3丁目に市立若江公民分館が建設された。府道大阪布施綫手線の北側、古くから若江城跡の中心と伝えられている一段高くなっているところであり、工事の進行に注意していたが、果たしておびただしい遺物の出土している現場に遭遇した。土師器、須恵器をはじめ奈良、平安時代の屋瓦があり、若江城の遺構の下により古い時期の遺構が存在していることを確認することができたのはこの時である。

昭和47年度には、若江南町にある市立若江小学校において校舎の増築が計画された。周辺の各所から遺物が出土していることでもあり、若江小学校がここに移転し校舎の建築が行なわれた際に多数の遺物が出土していることを聞いていた。このため文化財課としては、工事に先立って発掘調査を行なう必要を主張し、昭和47年12月から昭和48年3月にかけて、東大阪市遺跡保護調査会への委託事業として調査を実施した。その結果、敷地500m²のほとんど全体に亘って、井戸、柱穴、溝などの遺構を検出し、中世の遺物が多数を占めていることからこれを若江城の遺構と断定した。こうして史上に有名な“まぼろしの若江城”がはじめて現実の姿となって検出されたのである。^⑤

若江の地域における発掘調査は以後継続して実施して来た。とくに市建設局による下水管渠築造に伴う調査及び大阪府土木部による府道大阪布施綫手線の拡張に伴う調査等がその主なものであり、遺構・遺物の検出を見ている。

若江の地域には、上記のように日本史上にも重要な「若江城」が所在し、その他「若江寺跡」「若江郡衙跡」等の遺跡が重なって存在している可能性がある。また、付近一帯が市街地であることから、住宅が密集しており、下水管渠の築造や道路拡張などの公共事業が相次ぎ、さらに宅地の造成や住宅の増改築などが頻繁に行なわれていることから、それぞれの遺跡の所在と範囲を確認すると共に、保存対策を立てる必要が生じて来た。

本調査は、こうした現状と、埋蔵文化財包蔵地調査5ヵ年計画にもとづき、国庫及び府費の補助事業として実施したものである。調査は昭和49年11月28日より50年3月31日まで実施した。調査の実施にあたっては東大阪市遺跡保護調査会の協力を受けた他、多くの学生諸氏の参加を得た。また土地所有者の竹内誠、川口治三郎、東田保の諸氏及び若江農業協同組合の藤原長治郎組合長、玉里参事には自由に調査することの同意を受けた他何かと御援助をいただいた。これらの方々に記して感謝の意を表する。

- ① 信行寺に所蔵されていた遺物については、荻田昭次、桑原正明両氏によって紹介されている「布施周辺の考古遺跡」『河内文化』第8号、昭和37年)。この資料は故巨摩峰秋氏から市に寄贈された。
- ② 若江鏡神社にのこされていた資料は、故奥野清氏から市に寄贈され、信行寺旧蔵の資料と共に本市文化財課で収蔵保管している。
- ③ 河内市教育委員会『河内市若江巨摩庵寺跡の調査』(昭和39年)
- ④ 河内市教育委員会『瓜生堂遺跡』(昭和41年)
- ⑤ 現在資料の整理を進めている。
- ⑥ 才原金弘、松田順一郎、飯塚順之、飯塚典正、高山正久、奥間建二、岡崎敏夫、西岡義弘、仲辻英民、有山淳司、池田康二



第2図 昭和47年度若江小学校内調査風景

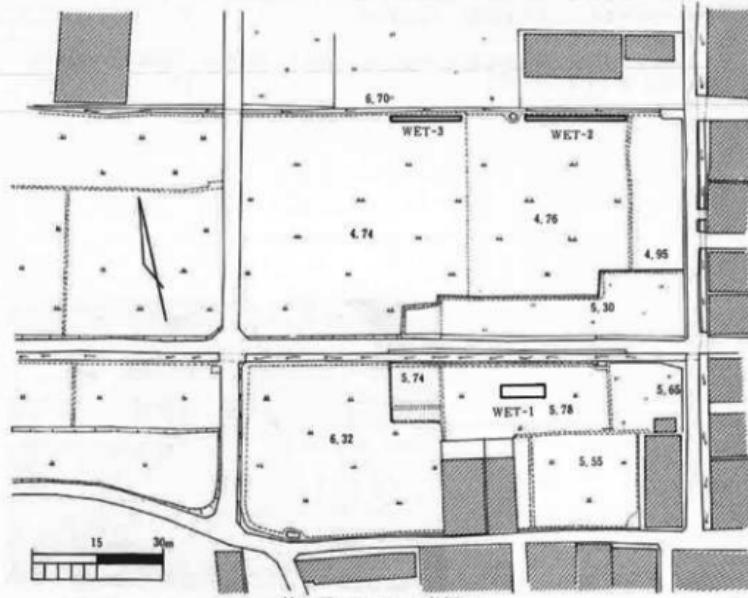
3. 調査の概要

I. 若江寺跡 (W E T)

東大阪市若江南町2丁目50~60番地にかけての地は、古くから若江寺のあったところと周知されており、若江鏡神社の西方の田圃には字名として「寺垣内」という呼名が残こっている。調査は、まず一段高い位置にある田圃に東西10m、南北3mの第1トレンチを設定し、その南の一段低い田圃に東西20m、南北1mの第2トレンチ、その西の田圃に東西15m、南北1mの第3トレンチをそれぞれ設定した。

1. W E T-1トレンチ

東大阪市若江南町2丁目53番地の田圃にW E T-1トレンチを設定した。この田圃は、周囲の田圃より一段高くなっている、建物跡の可能性が十分考えられる場所であった。調査は、まず耕土、床土をそれぞれ別々に取り除き、調査終了後埋め戻しが可能な状態にしたのち、順次掘り下げをおこなった。調査の結果、この土地が周囲の田圃より一段高くなっているのは、近世以後の盛土のためであることが明らかになったが、これは、第5層、第6層からセトモノの茶碗類が出土したことからも明らかである。地表下約80cmで第8層茶褐色粘土層に



第3図 トレンチ位置図

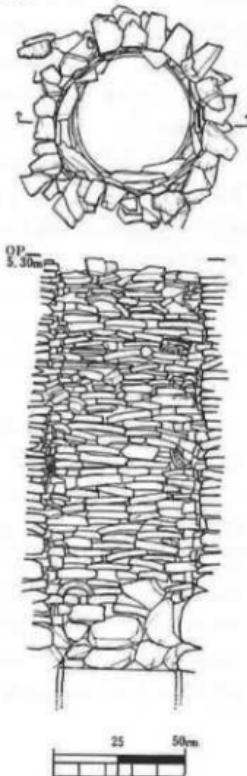


第4図 WET-1トレングチ北壁断面図

至るが、8層直上で幅約2.5m、高さ0.3mで盛りあがりが南北に続く状態を確認した。これは、併出遺物からも綿作のためのウネと考えられ、ウネに沿って溝が2~3m間隔でつくられていた。第8層直上では井戸遺構を1基検出した。井戸は、径40cmで深さ2mまで掘り下げる底には達し得なかった。井戸枠は直上から1.5mの深さまでは瓦積みでつくっているが、それより下は丸木をくり抜いたものを二枚合せでつくっている。井戸枠に使用された瓦の中には、奈良~室町時代末頃までの瓦を使用していることから、井戸の時期は少なくとも中世末~近世期のものと考えられる。第8層以下の掘り下げは、現地が水田であるため調査終了後の復元が不可能になることから全面に掘り下げるのをかけて、トレングチ内で試し掘りをおこなった。この結果、第10層から若干の土師片などを検出したのにとどまった。

2. WET-2・3トレングチ

WET-1トレングチの北の田園、東大阪市若江南町2丁目54番地、55番地のそれぞれにWET-2・3トレングチを設定した。田園中央での調査の同意は得られなかつたが、田園の北端での調査の同意を受けることができたので1m幅で東西に長く設定した。調査は、まず耕土・床土を別々に掘り下げた後、第3層黄褐色砂質土へと掘り下げた。第4層暗茶褐色粘質土を取り除くと第5層黒褐色粘質土直上で落ち込みを検出した。落ち込みは、北から南へ深さ約10~20cmでなだらかに傾斜をするものでこれだけでは遺構とは考えられない。第5・6・7層中より土師片、煙



第5図 WET-1トレングチ井戸実測図



第6図 WET-2トレンチ南壁断面図

明皿片、瓦器焼、摺鉢などが若干出土している。さらに第8層茶灰褐色粘質土、第9層青灰色砂層と掘り下がる、8層以下は粘土と砂層が互層になって堆積している状態であり、遺物も土師質土釜片、瓦器片などとともに、著しく磨滅を受けた弥生式土器、土師器類が混入していることから、流れ込みによる堆積状態を示すものと思われ、遺構は検出されなかった。

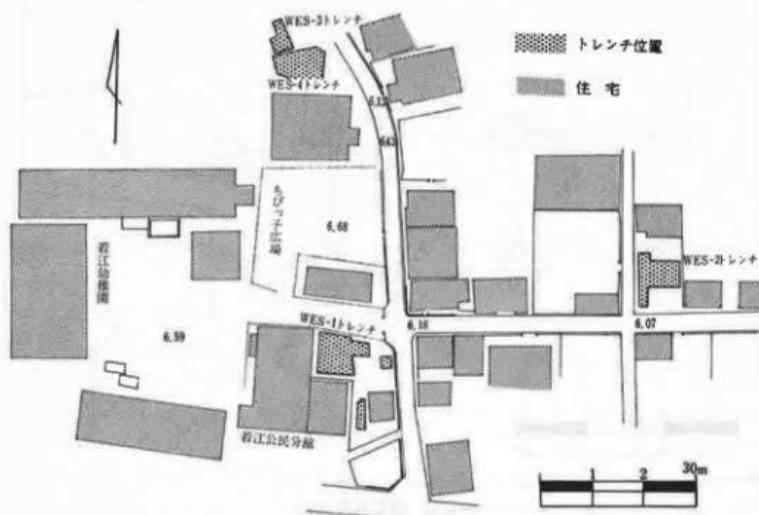
出土遺物

第2トレンチで土師質小皿、瓦質火舎、青磁碗、土師質土釜がある。土師質の小皿は口径8cmで、底面が狭く(底径2.5cm)、口縁に煤が付着し、厚手で焼成不良のものと、口径が10cm底径が4.0cm前後で淡褐色を呈し焼成良好なものがある。瓦質の火舎は口径29.2cmで外面に菊花文を刻印している。青磁碗は底部のみで見込みに文様を描いている。土釜は口径24.0cmで口頭部はやや内傾しながら立ち上がりその外面には段をつけその上をていねいに横ナデしている。鋤は広くやや上向きについており鋤下に窓削りを施している。内面は刷毛による調整で口縁は横ナデを施している。調部外面は窓削りをして薄くしている。胎土には沙を多く含む。

小結

若江寺の存在は、附近の田園に「寺垣内」の字名が残されていることや、若江小学校を中心とした地域から奈良時代に属する瓦類が多量に出土することからも十分伺うことができた。しかしながら、今回調査を実施した範囲からは、若江寺跡の存在を立証する資料は何ら検出できなかつたが、調査地が推定範囲のごく一部であることから考へるなら、早急に結論をだすことはできない。むしろ、今回の調査結果から考へるならば、若江寺跡の遺構は、若江城の遺構と重複する可能性が強いと考える方が妥当であろう。つまり、若江城築造の際にかなり削平したか、地下に埋没したものと考えられる。また、鏡神社の西方に「クルス」の字名が残されているが、若江城に関係した教会堂の跡と推定されている(第19図)。今回、調査予定していたが、調査の同意が得られなかつたため、断念したのは残念であった。

II. 若江城跡 (WES)



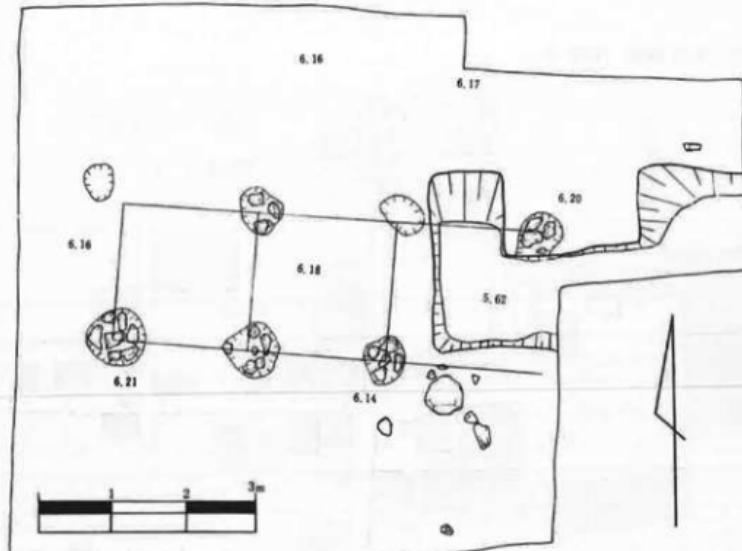
第7図 トレンチ位置図

若江城跡は、現在の市立若江幼稚園の敷地を中心とした一帯が考えられており、「城」の字名も残されている。城跡の周囲には、家が建てこんでしまっているが、空地、改築予定地などに計4カ所のトレンチを設定した。

1. WES-1トレンチ

WES-1トレンチは、若江公民分館の東側空地（若江北町3丁目526番地）に設定した。調査は、まず空地に8m方形にトレンチを設定し掘り下げを開始した。盛土を除去し、旧表土を取り除くと人頭大の石組を検出したので、この石組の性格を明らかにするために、このベース上で精査をおこなった。この結果、石組は東西方向に二列で規則正しく、1.9m間隔で並ぶことを確認することができ建跡物と考えた。礎石は、抜き取られているが、根固めに使用したと思われる礎石のみが残存していた。雨落ち溝などの施設はなく、根石も南北方向に統くものがないところより、廊下のような建物であったと推定される。礎石列のあるベースは、粘質土の淡灰褐色土によりはり床をしていることが断面で観察できた。

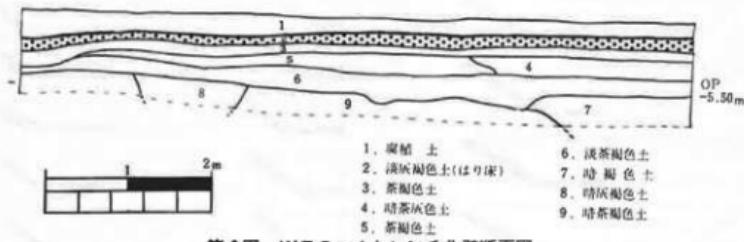
礎石列の規模及び他の建物跡の追求は、すでに既設の建物に囲まれているためにできなかった。礎石列の時期を決定するため、礎石列のすぐ北側でトレンチを設定し下層の状態を観察したところ、礎石列より0.5m下で土師質燈明皿、大皿をつめ込んだ状態で南北に走る溝状



第8図 碓石列実測図

造構を確認した。溝状造構は、幅約50cm、深さ30cmの小規模なものであり、溝の規模、性格を明らかにするため溝に沿ってトレンチを南北に拡張したが、途中で自然に消滅しており、用途は不明である。

さらに掘り下げをおこなったところ、礎石列より下へ1mの地点で、径2.5m、深さ0.6mの落ち込みの北半分を検出した。落ち込みの底には、瓦器焼2個体が出土した。落ち込みの南半分は、礎石列にかかるため、拡張するのを断念したため、性格については不明である。瓦器焼は、12C頃に比定されるものであり、この結果、礎石列は少なくとも鎌倉末期以降のものであり、造構面が浅いにもかかわらず、土層が擾乱されていないことなどからも室町期末の若江城最終期の造構である可能性が大きいと言える。伴出遺物が皆無と言つていい状態なので断定はさけたいが、一応若江城に関連する造構と考えておきたい。



出土遺物

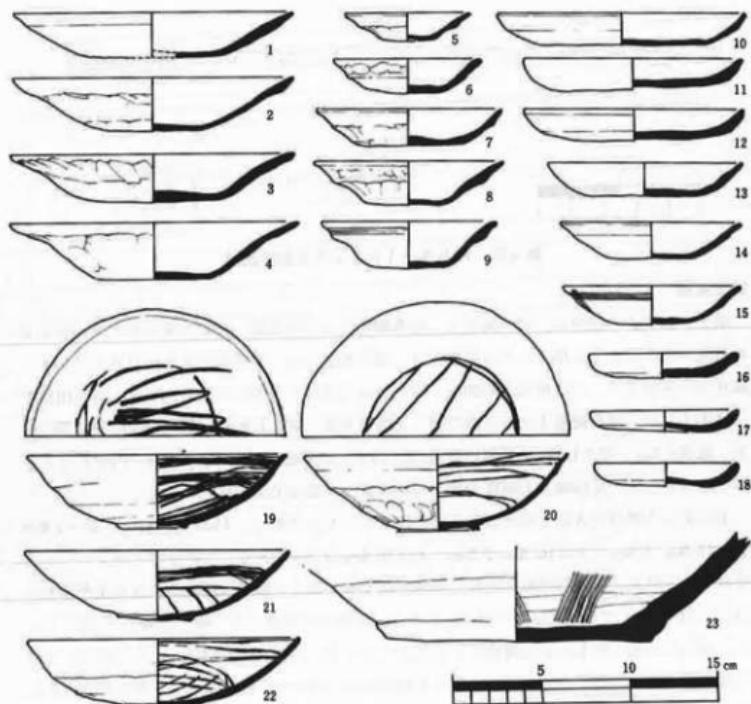
第1トレーンチの遺物は、暗灰褐色土、暗茶褐色土と今回発掘した最下層にあたる円形を呈する落ち込みの中から出土したものである。暗灰褐色土は、暗茶褐色土を切り込んでできた溝状内の堆積土で、この東端に幅50cm、厚さ30cmで南北に土師質の大皿、小皿、陶質器鉢が一括出土した。暗茶褐色土からは堀の脚、土師質大皿、長さ3.8cm、厚さ1.0cmの滑石製の勾玉、直径8.2cm、厚さ1.1cmの瓦製盆盤、鉄製の瓦釘、皇宋通宝(北宋錢)が出土。円形を呈する落ち込みからは、瓦器壇、土師質土釜、土師質皿、小皿が出土した。

(1)～(4)は土師質の大皿で暗灰褐色土から出土したものである。(1)は口径16.0cm、器高2.6cm、(2)は15.9cm、3.0cm、(3)は16.2cm、2.8cm、(4)は16.4cm、3.3cmである。これらの大皿はすべて手捏ねであり外面には成形段階の指紋・指頭圧痕が多く残す。器壁は直線的に立ち上がるもの(1,2)、外彎して立ち上がるものの(3,4)がある。調整は内器壁は右一週りの横ナデを施していく、見込みに粗い刷毛による調整をしたものもある(3)。外面は成形時に施された指腹部による左廻りの圧痕が残っているもの(3)もあり全般的には口縁だけに軽い横ナデを施す程度である。色調は淡褐色である。

(5)～(9)、(13)～(18)は土師質の小皿である。製作手法や調整方法は大皿と酷似しているが、見込みに一方向のナデを施したもの(7, 8, 9, 14, 16, 17, 18)、内面の横ナデが円を描かず直線的で多角形を呈するものの(6)、口縁に煤の付着がみられるものの(5, 6)、底が平らでなくやや上げ底を呈するものの(5, 7, 8, 14, 15, 17, 18)がある。なお(16)～(18)は器壁は厚くて立ち上がりは短く外彎しており、横円を呈するもの(16)もあり一般に焼成、つくりとも悪い。色調は前者は淡褐色、橙褐色を呈するのに対し後者は暗褐色である。

(10)～(12)は最下層より出土したもので口径、器高はそれぞれ、14.2cm、1.8cm、12.4cm、1.9cm、12.4cm、2.0cmで浅い皿である。(10)は橙褐色を呈し、口縁端部と外面にヘラをあて面取りを行なっている。(11)、(12)は暗褐色を呈し、内外壁とも右一週りの強い横ナデを施し鋭い棱がついている。

(19)～(22)は瓦器碗で口径、器高は、15.0cm、4.2cm、15.1cm、4.4cm、15.2cm、3.9cm、15.5cm、

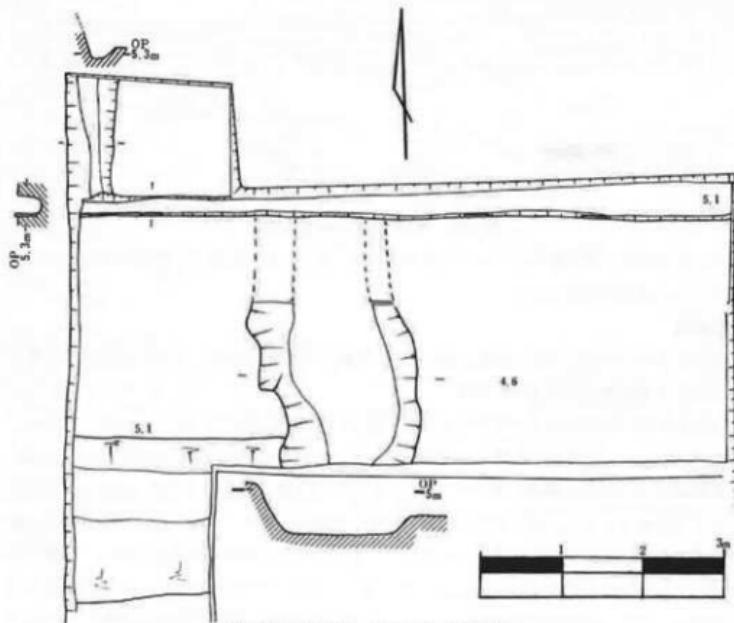


第10図 出土遺物

4.0cmである。内面には螺旋状の粗い暗文を施し、見込みはジグザグ文(19, 20, 22)と平行線(21)とがある。外面は指頭圧痕が多く残し口縁を横ナデしている。高台はすべて貼付で断面三角形のもの(21, 22)、断面三角形のものをつけナデにより台形を呈するもの(19)、平らにナデたもの(20)があるがその用をなきない形式的なもの(21)もある。19は口縁端を横ナデにより面をつくり、また見込みには焼成の時につけた高台痕あるいは窯道具痕と思われるものがついている。色調は黒灰色(19, 20, 22)と淡灰色(22)がある。

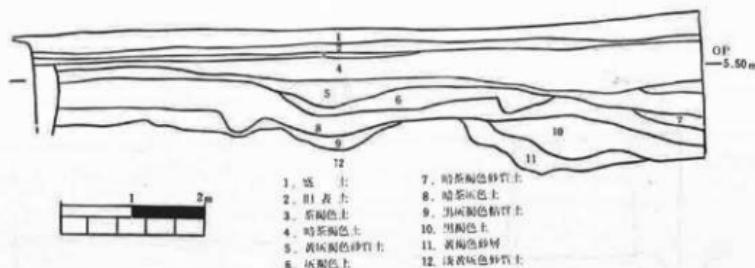
23は陶質摺鉢で土師質大皿と併出した。この摺鉢は粘土を輪積みにして指又は手掌で成形し、内外面とも右廻りの横ナデによって調整を行ない、その後に幅2.4cm、8本からなる櫛を用いて、底部から口縁に向って放射状に条溝をついている。しかし条溝はたび重なる使用のため、かなり磨耗している。外底部は指頭圧痕が目立ち、内外器壁とも粘土の維ぎ目が頗る著である。

2. WES-2トレンチ



第11図 WES-2トレンチ平面図

WES-2トレンチは、1トレンチの東60mの地点、若江本町4丁目544番地に設定した。空地が、 140m^2 と狭いため、約4%について調査対象地として実施した。盛土を除去し、旧耕土、床土を取り除き掘り下げたところ地表下約1mで東西に走る溝状造構を検出したので、この面での精査を行なった。溝は幅30cm、深さ35cmであり、南側壁には埠を立て並べており、トレンチ西壁端から1.2mまでは四枚の埠がほぼ良好な状態で残存していた。埠は25cm×27cmではほぼ方形で、厚さ2.5cmを量する。東方向はほとんど抜き取られていたが一部に上部を破損した状態で残存していることから西から東へ続いているものと考えられる。溝内から土師器片、瓦器片が出土したが、細片のため詳細な時期は不明である。この埠列の溝状造構の性格を明らかにするため、トレンチの西壁にそってさらに掘り下げを行なったところ、埠列の延長は検出できなかったが、幅1.5m、深さ0.4mの落ち込みが段状に南から北へ続くことが明らかとなり、落ち込み内より瓦質燈明皿、瓦器碗、ねり鉢などを発見した。出土遺物の形式よりこの落ち込みは鎌倉末期以降の時期に比定できるものである。このことより考えるなら、埠を側壁にした溝状造構は、少なくとも鎌倉時代末以降のものと考えられる。埠列は、



第12図 WES-2 西壁断面図

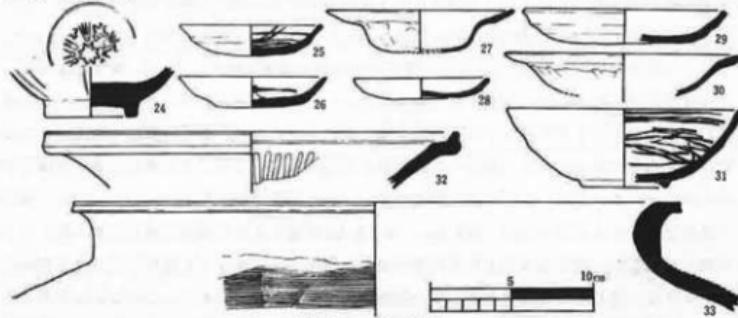
まださらには西へ、若江城の中心部分に向かって続くように思われるが、建物が建ち並んでいるため、追求は不可能である。

出土遺物

第2トレチでは、瓦質の火舎、壺、土釜、練鉢、土師質の小皿、土釜、瓦器塊、小皿、青磁碗、陶質搗鉢、須恵器片がある。

25は青磁碗で磁胎は明るい青灰色を呈し、胎は0.4~0.5mmの厚さである。見込みには星、花と思われるものを中心に放射状に文様を描き出している。高台は右廻りの削り出しである。

2526は瓦器小皿で、内面と外口縁に横ナデを施し、内面にはその上に粗い蝶旋文、見込みには平行の暗文を描く。27~30は土師質小皿で、2730は内寄して立ち上がったのを外折させている。2829はやや上げ底で厚い器壁をもつ。29は二度のナデにより外面に段をつくる。30は水筋した粘土を使用している。32は青磁の鉢で口縁を一端外折させた上、それをつまみあげている。内面には放射状の沈線文を描く。31は口径14.4cm、器高4.8cmの瓦器塊で内外面に粗い暗文を施す。高台は断面三角形の貼付高台である。33は瓦質の壺で肩部から胴部に幅3cmのタタキ目をつける。外口縁と内面は横ナデ調整し、内口縁はヘラ削りにより水平に面取りしナデを施す。



第13図 出土遺物

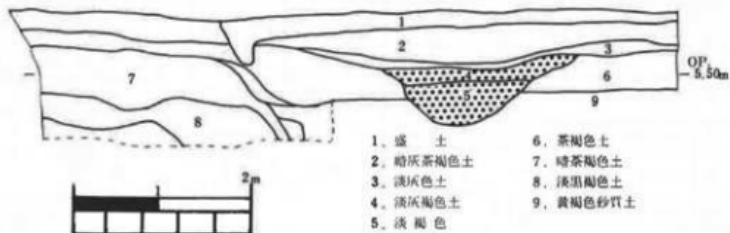
3. WES-3・4トレンチ

WES-3・4トレンチは、1トレンチの北50mの地点、若江北町3丁目530番地に設定した。調査地は、現在若江農業協同組合の倉庫になっているところであるが、改築の計画があるため、調査の必要が生じてきた。まず、遺構・遺物の状態を調べるために、第3トレンチを設定した。その結果地表下約1.5mのところで古瓦が多量に出土したため、現在ある倉庫の解体を待ってトレンチをあらたに拡張して第4トレンチとして調査を行なった。

第4トレンチで検出した瓦は、溝状に北から南へ続き、若江農協の建物の方へと続いている瓦ダメであることを確認した。瓦ダメは、幅1.5m、深さ0.3~0.5mの溝状の遺構を放棄した段階で瓦ダメとして利用したようで、溝内に瓦がぎっしりつまっていた。瓦ダメ内より、平安~室町時代末に至る瓦が出土している。トレンチ内の土層は、場所によってかなりの相違が認められ、瓦ダメの溝は、茶褐色土をベースにしているが、それ以外の地点は黄褐色砂質土の堆積であった。黄褐色砂質土より下は砂層が続き砂層中より弥生時代後期に属する土器の底部、口縁部などが混入しており、流れ込みによる堆積であると考えられる。



第14図 瓦ダメ遺構図



第15図 第4トレンチ北壁断面図

現時点では溝状遺構は、若江城に関する遺構であったと断定はできないが、時期的には室町末期と考えられ、黄褐色砂質をベースに盛土をしてつくった遺構であろう。

出土遺物

若江の地域に所在する遺跡としては、文献・記録の上に名をとどめ、その存在の明らかな、若江寺跡・若江城跡のほか、若江郡衙跡・若江荘の政所等の存在を想定することができる。

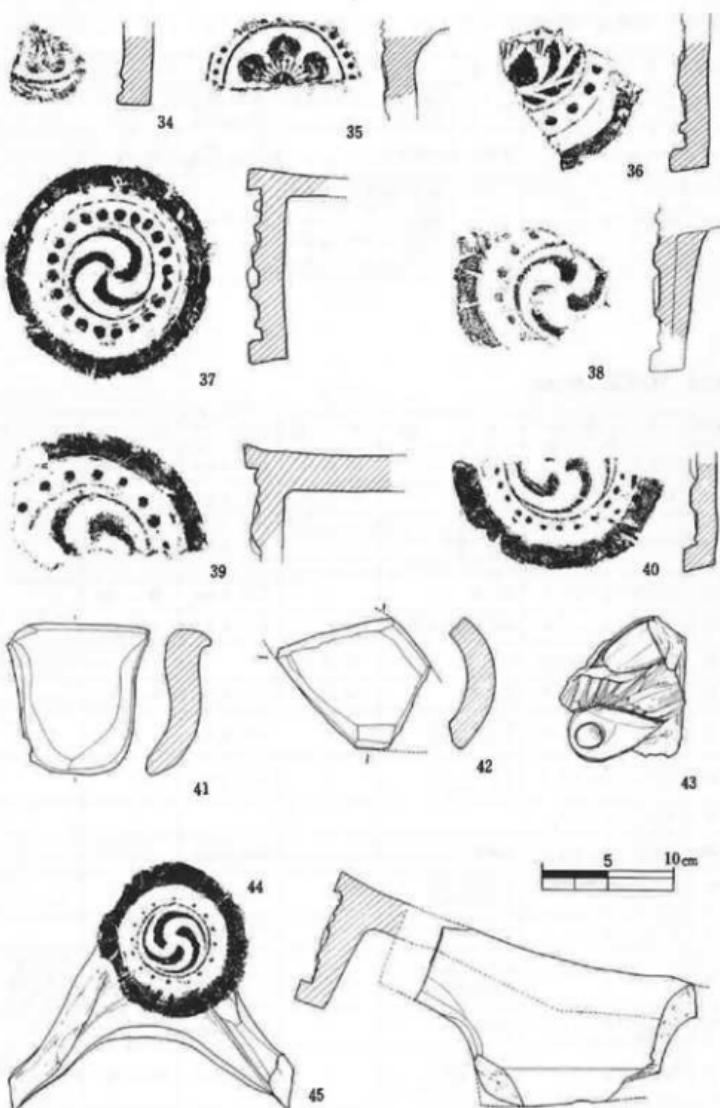
昭和47年度における市立若江小学校校舎建築に伴う調査や、今回の調査によって、この地域のかなり広い範囲にわたって、遺構の存在を確認することができたが、各遺構の性格や規模・構造等については、まだ明らかでない。これらの各遺構からの出土遺物は、その内容はさまざまであり、年代にも著しい幅をなすわち年代差がみとめられ、各時代の性格の異った遺跡の複合が考えられる。

出土遺物のうち、とくに屋瓦については、奈良時代前期から室町時代に及んでおり、現在の段階では遺構と結びつけて考えることは困難である。しかし、これらの屋瓦が、若江寺及び若江城に使われていたものであるに相違ないが、文献に見える若江城の創設は南北朝時代であり、それ以前の屋瓦は若江寺に伴うものと考えることができる。しかし、中世の屋瓦については、若江寺が中世まで存続していたことが当然考えられ、その判別は現在では不可能である。遺構の上では明確ではないが、各時代の屋瓦が混在して出土することは、奈良時代前期に創立され、中世まで存続した若江寺の遺構の上に若江城が築かれたことを想定させるが今後の検討を待ちたい。

本概報では、今回の調査において出土した屋瓦資料を表示するにとどめた。今回出土した屋瓦の中には、棟端飾板（鬼瓦）、鳥衾、雁振、面戸、埠など、中世のいわゆる道具瓦が多数あり、従来ほとんど注意されることのなかった、中世屋瓦の内容、ならびに建築構造を明らかにことができる資料として注目される。

第1表 軒丸瓦（第16図）

番号	出土箇所	文様	色調	寸法	年代	備考
34	WET-2トレンチ	複弁蓮華文	灰 色	直径 不明	平安後期	
35	WES-4トレンチ	内区一單弁6草の蓮華文、外区一細密な珠文	*	復原 直径 13.8cm	*	若江小学校敷地で完形品が出土している。
36	WES-4トレンチ	内区一蓮華、中房外区一繰らな珠文	灰 黒 色	復原 直径 20.0cm	*	
37	WES-4トレンチ	巴文、密な珠文	灰 色	直径14.9cm	鎌倉	完形
38	WES-4トレンチ	巴文、疎らな珠文	灰 黑 色	復原 直径 15.8cm	室町	
39	WES-4トレンチ	巴文	*	直径14.5cm	*	
40	WES-4トレンチ	巴文、疎らな珠文	灰 色	復原 直径 16.6cm	*	



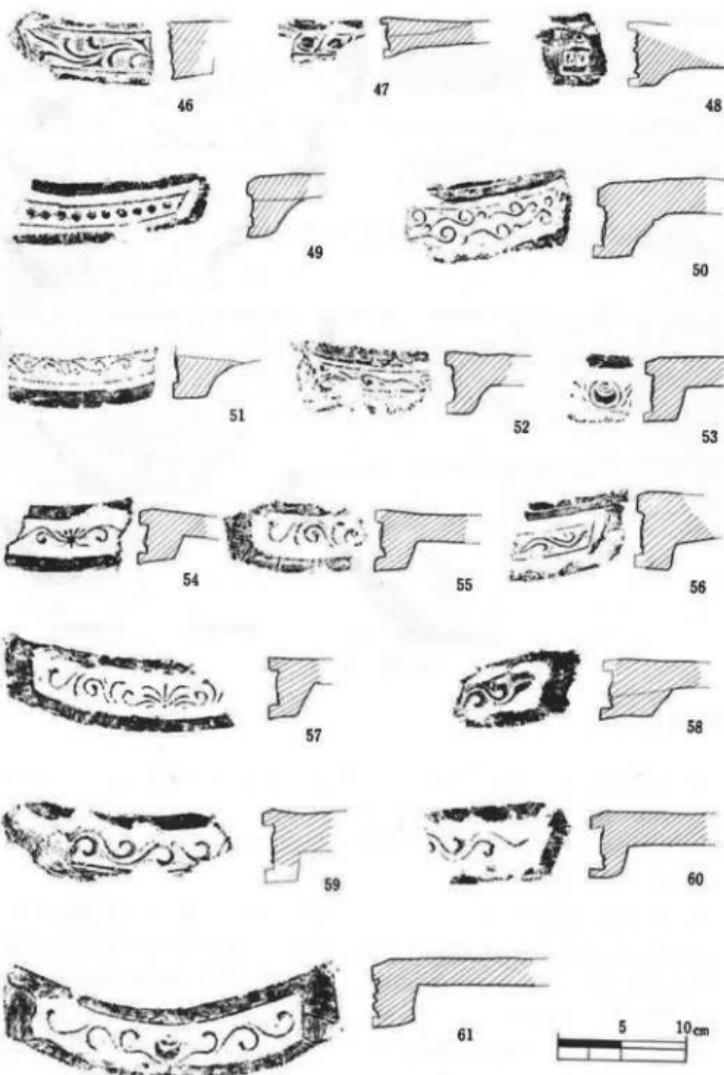
第16図 轩丸瓦・道具瓦

第2表 道具瓦（第16図）

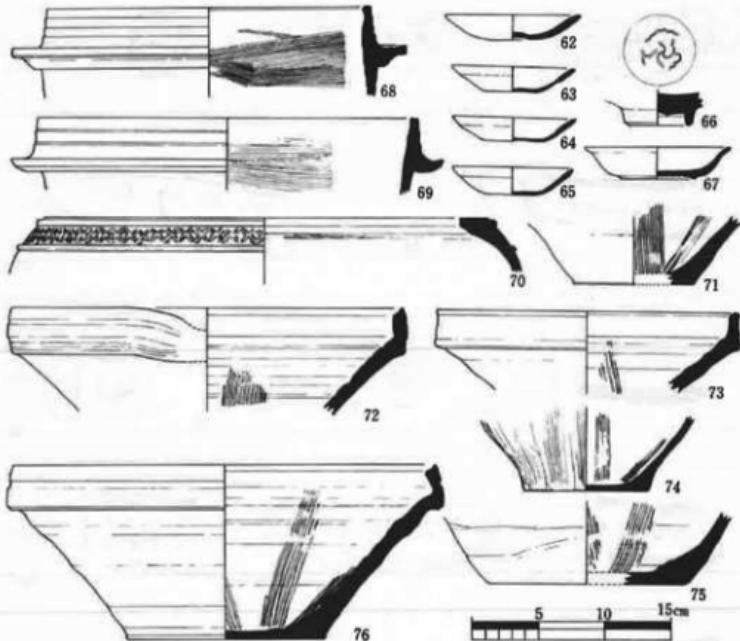
番号	出土箇所	名称	特 色	寸 法	年 代	備 考
41	WES-4トレンチ	面 戸	2個出土、舌状の小型のもの。	幅7~11cm 長さ10.5cm	室町?	
42	WES-4トレンチ	隅面戸	1個出土、	幅 9cm 厚1.8~2.5cm	室町?	
45	WES-4トレンチ	鳥 衣	雁振の棟端に当たるもので、先端に向かって傾斜をついている。両側に種浦飾板を受ける“くり込み”がある。	幅 19cm 高さ 9cm	室町?	

第3表 軒平瓦（第17図）

番号	出土箇所	文 様	色 調	寸 法	年 代	備 考
46	WES-4トレンチ	唐草文	灰褐色	厚さ 4.5cm	平安後期	
47	WET-2トレンチ	珠 文	灰黑色	厚さ 2.3cm	+	
48	WET-2トレンチ	五輪塔文 塔身に種子「ア」 を入れている。	+	厚さ 5.3cm	+	
49	WES-4トレンチ	珠 文	+	厚さ 4.4cm	鎌倉	
50	WES-4トレンチ	唐草文(中心飾不明)	褐色	厚さ 5.7cm	+	
51	WES-4トレンチ	唐草文	茶褐色		+	上半分割落
52	WES-4トレンチ	唐草文	灰黑色	厚さ 4.7cm	室町	
53	WET-2トレンチ	中心飾・宝珠 左右に唐草文	+	厚さ 4.8cm	+	
54	WES-3トレンチ	中心飾に花文 左右に唐草文	+	厚さ 4.5cm	+	
55	WES-4トレンチ		+		+	
56	WES-4トレンチ	唐草文	+	厚さ 4.5cm	+	
57	WES-4トレンチ	中心飾に花文 左右に唐草文	+	厚さ 4.8cm	+	
58	WES-4トレンチ	唐草文	+	厚さ 4.8cm	+	
59	WET-1トレンチ	中心飾・宝珠 左右に唐草文	+	厚さ 5.5cm	+	往生院跡 神感寺跡 と同範
60	WES-4トレンチ	唐草文	+	厚さ 4.8cm	+	
61	WES-4トレンチ	中心飾・宝珠 左右に唐草文 (14の次期的所産)	+	厚さ 5cm	室町末	若江城最後 の瓦と考え られる。



第17図 軒平瓦



第18図 土器類

土器類（第18図）

68、69は土師質の土釜である。68は口径24.9cm、69は29.2cmで、口頭部は直立ぎみに立ち上がり外側面に段をつけその上を丁寧に横ナデしている。鋸はやや上向きで端部は平らにナデ、鋸下部は斜めにヘラ削りをした後横ナデを行なう。調節外面はヘラ削りをして薄くしている。内面は刷毛による調整を行なう。

62～65は土師質の小皿である。やや上げ底で外彫しながら立ち上がり端部は肥厚する。62は内外面とも口縁端から7mmの幅に煤の付着がみられる。66は青磁の碗で見込みには抽象的な文様を描き出している。高台は削り出しで磁胎は灰色を呈する。67は陶製の皿で、緑色をした透明のガラス質の釉をかけている。胎土には気泡がたくさんあり軟質である。

70は瓦質の火舍で口径33.7cm。器表には二つの突帯をめぐらしその間に二つの花柄を版とした押印がめぐらっている。内面は横ナデや刷毛による調整が行なわれている。

71～76は擂鉢であり陶質（72, 73, 75, 76）、瓦質（71）、土師質（74）がある。これらのものは全て

破片であり、図上で復元したものであるので片口の鉢は72だけであるが、片口だけの破片や片口になる弯曲を示すものもあり、摺鉢は全て片口をもつだろうと推定される。口縁は器壁を内折させ、それを上下に拡張し外面に凹線をめぐらしている(72,76)。条構は横ナデを施した後に底部より放射状につけているが、その数が8本のもの(74,75,76)、12本のもの(72)、13本のもの(7)がある。

4. まとめ

今回の発掘調査は、若江寺・若江城の遺構を確認し、宅地開発などから保存対策を講じる必要から実施したものである。

推定若江寺跡の範囲は、現在水田、畠などに利用されているため、調査範囲に多くの制限があったが三ヵ所のトレーンチを設定することができた。その結果、今回の調査では若江寺跡に関する遺構は何ら検出できなかった。ただ、第1トレーンチより瓦積みの井戸遺構及び中世期に比定される若干の土器が検出されていることから、今後の調査によりこの時期の遺構が発見される可能性が残されている。また、若江寺跡の遺構は、昭和47年の若江小学校敷地内の発掘調査により奈良時代に属する瓦類が、鎌倉、室町時代の瓦類と混入して大量に出土していることから、若江城の遺構に重複するとも考えられ、今後の調査に残された問題点であろう。

若江城の範囲は、今までのところ図面上でしか、復原することができないが、字名でひろっていくと、現在の若江幼稚園の敷地を中心とした地域で、東は美女堂川に囲まれたところまで、南は鏡神社に至る地域が想定できる。また、江戸時代に作成された若江地区の用水路の図面を見ると、若江幼稚園の周辺を囲むように用水路が描かれており、若江城の堀を利用したものとも考えられ、貴重な資料であるが、発掘調査ではまだ確認していない。

若江城の遺構は、WES-1トレーンチにおいて建物跡と考えられる礎石列を検出したが、伴出遺物などがないために断定はできないが、一応若江城終末期における遺構であると考えて



第19図 若江城・若江寺字切図

おく。しかしながら、1トレンチにおいても地表下約2mの地点で落ち込み状の遺構を検出しており、出土した瓦器塊から鎌倉時代末のころの遺構と考えられることなどからも、若江城の遺構は、かなり時期的に重複して存在する可能性が伺われ、遺構も深い地点にも存在することが明らかになったことは、今後の調査を進める上で重要なことである。

WES-2トレンチでは、堀を使用した溝状遺構を検出したが、詳細な性格は不明であるが、若江城に関する何らかの施設であると考えられ、今後調査が進めば明らかになっていくであろう。

WES-4トレンチからは、多量の瓦が出土し、若江城の性格を知る上で貴重な資料となつた。特に、道具類の腰振、隅面戸瓦などの発見は、中世期の平城を考える上で重要な資料となるであろう。

若江城の調査は、今回の調査でやっとその端緒についたばかりであり、性格、規模などまだ不明な点が多い。今後の継続的な調査が切望される。



調査地風景



井戸遺構

図版一 WES—トレンチ



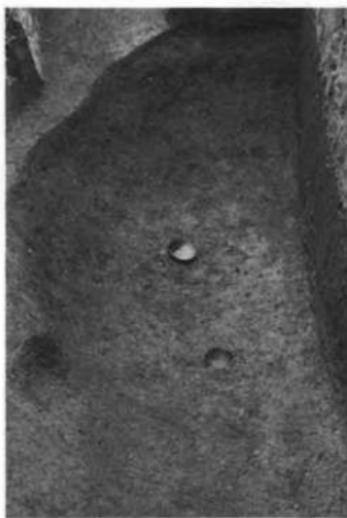
礫石列上から



礫石列正面から



調査地風景



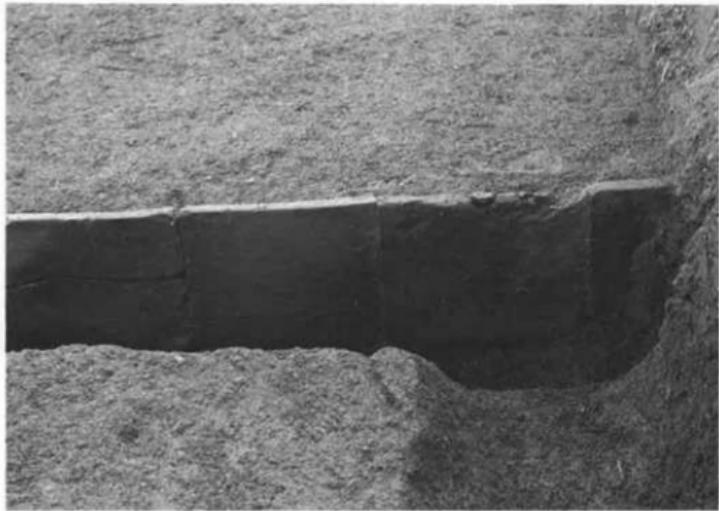
落ち込み及び瓦器塊出土状況



土師質皿出土状況



調査地風景



埠列出土状況

図版五

W E S - 四トレンチ



溝状瓦ダメ



瓦ダメ断面北より

圖版六 軒瓦
道具瓦 (1 / 3)



34



35



36



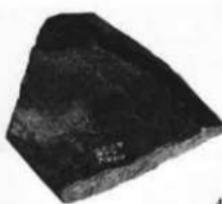
37



38



39



40



41



42

圖版七 軒平瓦 (1/3)



46



47



48



49



50



51



52



57



56



61



53

圖版八 土器類 (1/3)

